

男性の働き方を変えるために

鹿児島市「子育て環境調査(2012年)」によると、父親が家事・育児に関わる時間は、平日は1時間未満が過半数を占めています。また厚生労働省の調査によると、2012年度の父親の育児休業取得率は1.89%という状況です。内閣府の「男女のライフスタイルに関する調査」(2009年)では、男性が家事・育児に参画できない原因について、「仕事の量の多さ」「職場の雰囲気(帰宅しにくい)」「非効率的な仕事のやり方」が挙げられています。女性の継続就業の実現のためには、このような男性の状況を変えることが不可欠で、女性の活躍のためには、男性もともに変わっていくことが大事なのです。

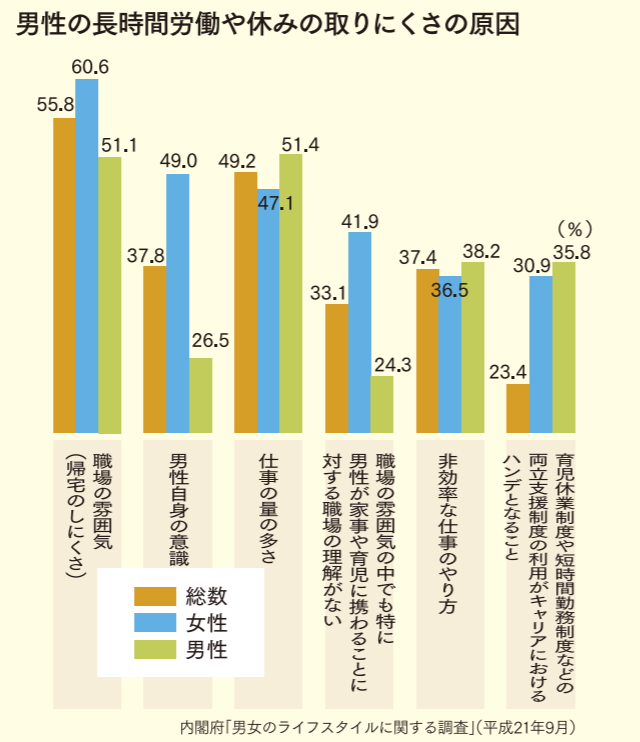
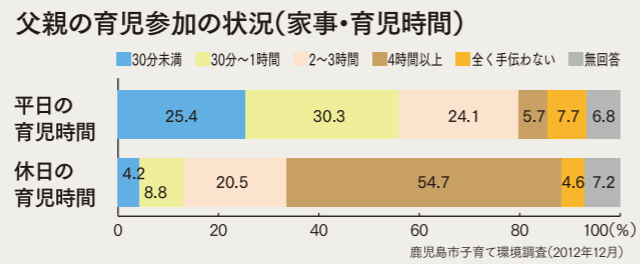
政府は男性の育児休業取得率を、2020年までに13%以上にするという目標を立てていますが、なかなか取得率は上がりません。その背景には、男性社員や部下の“イクメン”化を歓迎しない、経営者や管理者の意識、職場環境があるようです。このような状況を改善するために、「イクボス」が提唱されています。

「イクボス」になろう!



「イクボス」は部下の家事・育児参画に理解のある経営者や上司のことで、部下の育児休業取得を促すなど、仕事と育児を両立しやすい環境の整備に努めるリーダーのことです。子育てに積極的にかかわりたいと考える男性でも、育児休業などを利用しにくかったり、退社しにくかったりする雰囲気が理由で躊躇している人は少なくありません。そこで社員の状況を理解し、育休取得や時短勤務を奨励し、かつ組織の業績を上げられるようマネジメントするのが優秀なイクボスです。ワーク・ライフ・バランスが充実することで、従業員も限られた時間で成果を上げようと努力し、結果的に業績向上にもつながります。

女性が活躍することで職場に多様性が生まれ、企業に新しい価値創造が生まれます。上司が変われば、組織も変わり、部下も変わるでしょう。また家庭においては、父親が変わることで、家族が変わる…。この積み重ねの中で、すべての人が輝ける社会が実現できるのではないのでしょうか。



サンエールフェスタ2015が開催されました。



「自分のグッドライフバランスを見つけよう」



男女共同参画講演会で講演する蟹瀬さん

「サンエールフェスタ2015」の男女共同参画講演会が2月1日、サンエールかごしまであり、明治大学国際日本学部教授でジャーナリストの蟹瀬誠一さんが「蟹瀬誠一が語る幸せのワークライフバランス〜共に育て、働き、共に生きる〜」のテーマで、家庭や働き方について語りました。

蟹瀬さんは、人口減少社会に入っで就労人口が減っていく日本で女性がポテンシャルを發揮できる環境を整えることが重要と指摘。先進的な国としてデンマークを取り上げ、子育てをサポートするさまざまな経済的支援と保育サービスの充実を進めたことで出生率が上昇したことを紹介しました。さらに国会議員の4割を女性議員で占めることが法律で定められている点を挙げ、政治が変わり、法律・制度を作ることの重要性を強調しました。

蟹瀬さんは結婚して間もないころ、家庭と仕事のバランスの判断基準を「家庭51%、仕事49%」と決めたことや、保育園の園長の「共働きはやめて子育てにしましょう」の言葉が自らがイクメンに変わるきっかけになったエピソードを紹介しました。働く目的について蟹瀬さんは「第一義的には自立するため、そのためには歯を食いしばって頑張らなければいけないが、つらい仕事も道楽のように楽しいものにしたい」と指摘。最後に「仕事はあくまで人生の一部、各人が自分にちょうど良い加減の仕事と家庭のグッドライフバランスを見つけたい」と締めくくりました。

「ありのままの私」から始める未来へ ~Best of me~

「サンエールフェスタ2015」期間中(1月30日~2月1日)、「ありのままの私」から始める未来へ~Best of me~のテーマで男女共同参画関連のさまざまなワークショップが開かれ、多くの市民でにぎわいました。

「『Love(愛)を伝えよう!』ポップアートカードづくり」では、2つ折りのカードを開けると「Love」の文字が飛び出す、自分の思いを言葉にしたメッセージ入りのカードづくりを楽しみました。

「rainbow(虹色)な私のこころ、私のからだ~みんなで考える性の多様性~」では、鹿児島大学医学部の下敷須美子准教授の講演の後、生物学的な2分法ではなく、心や恋愛の対象など多様な性のあり方について参加者が意見を述べ合いました。

「みんなの防災講座」では、桜島が大爆発し、5分以内に家を出ないといけないという想定で、食料や医薬品などを詰め込む防災リュックづくりを体験。参加者は、事前に準備しておくことの大切さを実感していました。



女性に対する暴力に関する講演会報告

「子どもたちからのSOS~メール相談に見るデートDVのかたち~」



講師の上村茂仁さん

いろんな人とつながる力を身につけよう

女性に対する暴力をなくす運動期間(11月12日~25日)に合わせて、女性に対する暴力に関する講演会が11月24日、サンエールかごしまで開催されました。岡山市のウィメンズクリニック・かみむら院長の上村茂仁さんが「子どもたちからのSOS~メール相談に見るデートDVのかたち~」と題して話しました。

DV防止プロジェクト・おかやま副代表、日本思春期学会評議員を務める上村さんは、子どもたちの相談からデートDVが10代の若いカップルでも多く発生していること、女性がDV被害を受けても離れられない理由として「相手が優しいから」がポイントになっていることを指摘しました。

「デートDVのキーワードは、優しい相手でも怖いと感じる時があること。恋愛には約束がつきものだが、相手への約束や束縛がだんだん細くなり、約束を守らせようと執着し、身体的・精神的暴力にエスカレート。被害者は相手に完全に束縛され、これまでの生活ができなくなってくる。寂しい時、つらい時に相談できる友達や仲間など、いろん

な人とつながる力を身につけてもらいたい」と話しました。

DVの被害者も加害者も寂しがり屋で依存する性格が強く、家庭環境の影響が大きいとも指摘。「子どものころ親と一緒に遊んでもらうことで自分が大切にされていると実感でき、相手も大切に思える。親と子がいっぱい遊ぶ親子関係がデートDVを予防する基本になる。小学校高学年からDV予防や性教育を始めることで、男女が相手をよく知ることができ、男女が対等に付き合えるようになる」と上村さん。NPOや行政、警察、学校などDV被害について相談を受ける側は、互いに連絡がとれるようにつながっていることも大切だと話しました。



講演会には多くの人が参加しました